

起きよ、光を放て

牧師 木戸 定

自慢話で申し訳ありません。私がお世話になっている春風とんぼさん(84歳)が主宰される春日井ロゴス腹話術研究会は、2014年緑綬褒章を受賞されました。とんぼさんは園遊会に招かれ、天皇陛下から直々に「これからも腹話術を続けてくださいね」とお言葉を頂かれました。「陛下！もう辞めようと思っています」と言おうとされた時には、陛下の後ろ姿しか見えなかったそうです。

昨年、天に召された師匠の春風イチローの指導は大変厳しいものでした。ロゴス腹話術には基本があり、私自身、うんざりするぐらい基本を何度も反復練習させられました。

とんぼさんは、その厳しい指導に耐え、若い時から腹話術でボランティア活動をされ、教会およびCS、社会福祉施設での奉仕は5100回を超えます。

イザヤ書60章1節に「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く」と書かれています。クリスマスの季節によく読まれる聖書の箇所です。

私は、ロゴス腹話術で奉仕されてきた春風とんぼさんの光に照らされる思いです。クリスチャンが国から勲章をもらうことに賛否両論ありますが、イチロー師匠が腹話術を始められた時には社会の評価は大変に低いものであったと伺っていますので、それだけ評価されたことに感慨深いものがあります。

私が思いますことは、うまず、たゆまず努力する人の姿を通して神の光は照り輝くのではないかということです。

私は生来の面倒くさがり屋で、怠け者です。そんな人間から神の光が輝くはずがないと常に反省しています。しかし、コリントの信徒への手紙一4章10節以下で、パウロは、次のように言っています。

「今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、苦勞して自分の手で稼いでいます。侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉を返しています。今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています。」

パウロが、このように語る背景には、キリストの福音を伝えようとするパウロたちがどれほどの苦勞があったことかと思えます。どんなに厳しく、辛い状況に置かれても、うまず、たゆまず努力し続けたからこそ、キリストの福音は世界中に広がっていったのです。

パウロは、それほどの苦勞をしていながら、自らの努力と苦勞を誇ることなく、こんなふうに言っています。

「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」ガラテヤの信徒への手紙2章20節。

讚美歌 21 256 番 6 節の歌詞に「この身と心を 主のまぶねとなし、とわに宿りたまえ。」とあります。怠けの者の私ですが、この身に主イエスが宿ってくださり、少しは、起きて、光を放てる人間になりたいと願うものです。

信仰告白

立川節子

わたしが島之内教会に来るようになりしたのは、主人と交際している時でした。主人から「島之内教会に行ってみよう」と誘われたのがきっかけでした。生まれて初めての体験、礼拝を見るのも、讚美歌を歌うのも初めてのことでした。心臓がドキドキして破裂しそうでしたが、来ておられる皆さんの顔がとても穏やかであったので、ホッとしました。

長女・尚美は6歳のとき、亡くなり、島之内教会で西原 明先生にお葬式をしていただきました。教会の皆様に、お祈りしていただき、ありがとうございました。長男・義哉は31歳、毎日新聞社で働き、次女・英里は多摩美術大学の4年生です。子育てには大変な時もありましたが、神様に守られて今日までやってこられて感謝しています。

愛唱聖句は「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」（創世記1章31節）です。スケールの大きな不思議な物語で、読むたびに引きつけられます。

洗礼を受けるきっかけは、何か劇的な改心の体験があったわけではありません。木戸牧師に勧められ、笑顔が素晴らしいと褒められ、ローバー・バーの「ほほえみ」という詩を紹介していただき、いつも微笑みを絶やさないクリスチャンになりたいと思いました。

「ほほえみ」という詩を読ませていただきます。

ほほえみ

それは一文も元手はかからない

しかし おどろくべきものを人に与える

ほほえみ

それは人に与えても一向に減りはしない

しかし もらった人を限りなく豊かにする

ほほえみ

それは人生のあらゆる問題に対して

神の与え給うた妙薬である

しかし このほほえみは、

金で買うことも、人から借りることも、
盗みとることも出来ない
ほほえみ
それを生み出すのに時間は
少しもかからない
しかし それを受けた人の記憶の中には
永遠に残ることさえある
ほほえみ
これがなくても生きてゆけるほど強い人は、
この世にいない
これがなくてもいいほど豊かな人もいない
ほほえみ
それは家庭の中に幸福を作り出し
職場に善意をつちかい
友情をやしなう
ほほえみ
それは 疲れ切った魂に安息を与え、
悲しい心に光をもたらす
それはあなたの心の奥底から湧き出して
惜しげもなく与えられた時だけ
値打ちが出てくるものである
ある人々は
あなたに ほほえみを与えることが
できないほど 疲れている
だから
その人に ほほえみを あげることの
出来るのは あなたです

今から、何十年も前、島之内教会に初めてこさせていただいて、皆さんの顔がとても穏やかであったと感じたのは、微笑みで迎えてくださったからだっと思ひます。笑顔になれない時もあります。けれども、イエス・キリストを救い主と信じ、島之内教会の皆様に支えられ、キリストの御後に従う歩みを心がけてゆきたいと思ひます。どうぞ、よろしくお願ひします。

生きる根拠、踏絵を踏む 足も痛い

黒田正純

きりすと われによみがえれば よみがえりにあたいするもの
すべて いのちをふきかえしゆくなり うらぶれはてし われなりしかど
あたいなき すぎこしかたには あらじとおもう 八木重吉

ある時、指揮者の小澤征爾さんのテレビ番組をみて、彼の語った言葉に感銘を受けたことがあって今も忘れないようにしている。音楽を演奏する時、アウフタクトを必ず意識すること、小沢さん独特の言葉で、西洋人が西洋音楽を演奏する時、彼らは意識しなくても出来るのだが、日本人は、必ずアウフタクトを意識すること、そのことではじめて、彼らに伍してよい演奏が出来るというのだ。専門用語で難しく聞こえるが、アウフタクトは、音楽が始まる前の一瞬の間のようなものと私は、とらえている。以来、合唱練習の前、必ずこの言葉を反芻するようになった。演奏前の一瞬の間を意識すること、あわてて歌い出すようでは、よい演奏にならない。その言葉が、生命の始めを意識することと私の心の中で繋がったのでした。

私は今年で 75 歳になるが、75 年前に生命の始めを意識したのではない。私が自分の生命を意識したのは、53 年前の復活祭での洗礼の時、私は、初めて私の生命に向き合うことが出来た。文字通り、私の古い生命が死んで、新しい生命が与えられたと信じた時だった。主イエス・キリストの復活と私の生命の再生を意識することは、その後の私の歩みの尽きることのない支えの源になった。小沢さんのアウフタクト論（音楽の始まりを意識すること）によって、私が歌うことも、私の生きる人生の大切なことになったように思う。

私の人生にも危機と思われる時があつて、誰かに守られたのではないかと思わされたことが 1～2 度あり、私は、信仰を与えられてよかった、深い感謝の思いで受け取っている。そういう時、祈るほかない私がある。年齢を重ねると、目に見える世界よりはるかに大きくて深い見えない世界があるということを気が付くようになって来る。結局、今まで何を知っていたつもりになっていたのだろう、肝心なことは何も知らないのではないかと思うようになった。

今年になって椎名麟三さんと遠藤周作さんの本を再び読むようになったのもそういう思いに関係している。若い頃、何度も読んだのだが、ほんとうのところ読んだつもりではないかと思えて来たのだ。私の持っている昭和 41 年出版の「沈黙」に遠藤さんのサインと押印があり、遠藤さんの自筆で「踏絵を踏む 足も痛い」と書いてある。大阪の書店に来られた時、書いて戴いたように記憶している。

遠藤さんが書いた、この短い文章「踏絵を踏む 足も痛い」、ここに書かれた足は遠藤さんの足でもあると私は思っています。カトリックの信仰を与えられて、この日本の大地でいつも合わない洋服を着せられているような痛み、ある時には足から血が流れるかもしれない。

この足の痛みをこの身に引き受けて、日本で生きる事、この事は私自身の問題でもありました。仏教寺院や神社が、争いなく混在し、和を最も大切なこととする、それでいて異質なものの見えない壁をつくる風土の中で、主イエス・キリストを告白することは、私にも踏絵を踏むような思いであったのは確かです。洗礼を受けたけれども、私の足に何の痛みも感じない、真剣な思いで信仰を生きようと思えば痛みを感じない方がむしろ不思議なことのようには私は思っていました。ジレンマや痛みを抱えて生きることこそ、本当に生きる事なのではないかと思うようになったのは、相当年齢を重ねてからのことであつたと思います。キリスト教環境が普通のこと、むしろ何よりすぐれたこととジレンマを感じなかつた西欧世界の人達が、ようやく遠藤さんの問題意識の根底を理解し始めたと思っています。

椎名麟三さんが去って 40 年以上、遠藤周作さんが天に帰って 20 年、すでに彼らの年齢を超えた私は、住む所はことなっているが、私は面はゆいながら同時代人として理解し、主イエス・キリストと共に生き得る幸いを感謝しています。彼らの思いは本の中に訊ねることが出来るし、信仰を共にする者として今も共に生きることが出来るのです。

幸せといえない子供時代から、家出同然に大阪ミナミでコックとして働き、後、今の山陽電車の乗務員になり、組合を組織し、投獄され、拷問を受け、獄中、むさぼるように本を読み、出獄、ドストエフスキーに導かれて小説を書いた椎名麟三さん、イエス・キリストに出会うまでまだ長い大波の中にほんろうされたものでした。フランス留学の後、結核を病んだ長い病床生活の中で、踏絵を強要され殉教、また転んでいった貧しい農漁民の名もない人たちの苦しみに向き合った遠藤周作さん、とてもじゃないが半端な人生ではありません。

いささかうわっ滑りで勇ましい声を聞くことが多い昨今、戦中、戦後の厳しい時代を試練として生きて作品に結実した人間的な声が、私にはたまらなく懐かしいのです。

主の御手に導かれて

野谷一二三

主の御名を讃美します。

平成 19 年 12 月 2 日はじめて島之内教会の礼拝に出席しました。9 年の月日が流れ、転会できる幸いを感謝します。諸事情により、3 年教会を離れることがありましたが、誕生日のハガキを送り続けてくださり、大変ありがたかったです。改めて御礼申し上げます。

キリスト教との出会いは、昭和 48 年 4 月近江兄弟社高校定時制部に入学、株式会社近江兄弟社に入社したことです。

一日 4 時間授業を受けて、4 時間メンソレータムの工場で働く昼間定時制でした。毎朝、工場で礼拝があり、聖書の授業があり、教会の日曜礼拝に出席して、レポートを提出することもありました。残念ながら昭和 50 年 12 月 24 日に会社が倒産しました。

市場からメンソレータムが消えるのではないかと、工場ではフル回転で、とても忙しくなったことを覚えています。卒業して奈良の大原和服専門学園（全寮制）に進学しました。4年後の国家検定をめざして、ひたすら着物を縫い続ける毎日でした。

ただ、ただ兄弟社がなつかしく学園前の大和キリスト教会の礼拝に出席するようになり、21歳の時受洗しました。本当に主に出会ったのは30歳を過ぎてからです。

卒業して、近江八幡に帰り、近江金田教会にもお世話になりました。昭和59年結婚して、奈良の王寺へ、夫、義母の通っていた桜井ルーテルに転会しました。それからは大変な日々で、桜井教会の吉田牧師から「毎日祈って過ごさない」、この言葉は、今も忘れられません。

コリント人への第1の手紙13章「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時にそれに耐えられるように、のがれる道も備えてくださるのである。」、この御言葉に支えられてきました。

娘達を6年間、聖公会の幼稚園にお世話になったことも幸いでした。二女が在園中、母の会本部の役員をさせていただきました。仕事をしなければならないので、お断りしたかったのですが、主任の先生が「野谷さんをお家から出してあげたいのです」、その一言で決まったと前任者の方が教えて下さいました。

それから少しずつ外に出られるようになりました。

色々なことがありましたが、義父母も送り、3年前に森の宮に転居しました。島之内教会で、34年ぶりに大門先生にお会いできたことも感謝です。

「新聞を読む前に聖書を読みなさい」

あたりまえのことが出来ていないことに反省させられる言葉です。

毎日、インターネットでFEBCの放送を聞き、心おだやかに過ごしています。

毎朝、終わりまで主が共にいてくださるようにお祈りしています。